

私の国語教室・随想

還暦教師の学び直し

「世界を歩けば、国語にあたる」

小豆・土庄中 根本 征子

今年を振り返ってみると、感慨深い一年であった。個人的な話になるが、還暦を迎えた私は、いよいよ今年度末で退職しようとしている。38年の教員人生に一区切り・・・(実際は一度退職して新たな立場で細々と教員生活は続けようと考えているが・・・)そんな決意のもと今年一年を過ごした。不思議なもので、「これが最後かも」と思うと、何もかもが愛おしい。どんな出来事も急に宝物のように輝き出す。こんな気持ちで38年を歩んでいれば、もっと名教師になれたのでは？と苦笑しつつも、今年は驚くほど日々を楽しめた。そんな中で、私がいまさらながら気づいたことを一つだけ紹介したい。

実は私は元来(といっても、つい最近ようやく自覚したことだが)好奇心旺盛らしい。オリンピックや万博と聞けば、「現地でこの目で見たい！」と思ってしまうタチだ。その裏には「こんな体験、もうできないかもしれない」という、妙にロマンチックな、しかし年齢を重ねた人間特有の切実さがあるのだろう。人生の折り返し地点はとっくに過ぎ、「残り時間アラート」がチカチカ点滅し始めたからこそ、まだまだ新しいことに挑戦したい。

小豆島という小さな島で育った私には、広い世界への憧れがずっと心のどこかにある。楽しみにしていた2020東京オリンピックが無観客に決定した際は、その悔しさを開会式のプラカードベアラーという形の参加で昇華させた。あれはあれで良い思い出だ。

そして今年度は、休日ごとに深夜フェリーに飛び乗り、ほとんどのパビリオンを巡るほど万博に通い詰めた。世界の一部を“高速疑似体験”

した。ほとんどのパビリオンを踏破した自分を、ちょっと褒めたい？いや、「あやうこそものぐるほしけれ」か。とにかく、あの会場には、国の違いも言葉の違いも軽々と飛び越える、不思議な躍動感が漂っていた。

大阪・関西万博には158を超える国や地域が参加し、文化と言葉と未来像が交差していた。賛否はあったが、ほぼ全てを歩き切った私は、あれこそ「未来への共創」の種がまかれた貴重な場だったと確信している。異なる文化が並び合い、互いの違いを興味深く語り合う空間に身を置くと、世界が身近で、温かく見えてくる。そして、思いがけない学びがあった。

私は長い間、海外の人と向き合ううえで最も大切なのは「英語力」だと思っていた。国語教師でありながら、である。しかし万博が伝えていたのは、「文化」だった。翻訳機が充実した今、言葉の壁は低くなりつつあるが、文化の奥行きは深まるばかりだ。その深みに触れるには、自分自身の“根っこ”が試される。その“根っこ”にあるべきものこそ、「国語」だったのだ。

私は、「日本語」と「国語」の違いをあらためて考えた。「国語」は単なる言語ではなく、日本の文化や精神性、私たちのアイデンティティそのものである。自国の文化を大切にできる人こそ、他国の文化にもまっすぐ向き合える。万博で見た、人々が違いを尊び合い、未来を共に描こうとする姿は、その真理を静かに示していた。

国語は、あらゆる学びと人間形成の根幹である。万博を通して私は、その当たり前的事实に静かに立ち返った。その気づきは深い余韻を伴って胸に刻まれている。世界を歩くほどに、人は自らの根っこへと帰っていく。

国語教師としてここまで歩んできた私にとって、一つの誇らしい悟りであった。